

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

第5回 東日本大震災仙台教区復興支援全国会議

2015年6月29日(月)～7月1日(水)、第5回 東日本大震災仙台教区復興支援全国会議が開催されました。
今年は、A、Bの2コースに分かれ、初日と2日目は各グループによって別々のところを周り、2日目の夕方に全員が仙台の元寺小路教会に集まりました。今回はその中の6月29日、30日に行われたAコースの視察・講話について、ご紹介します。

また、カリタス石巻ベースで7月11日の月命日に初めて七夕祭りイベントを開催しましたので、その様子もご紹介します。

Aコース 岩手・宮城沿岸部コース

聖フランシスコ病院修道女会管区長 Sr. 渡邊 洋

6月29日

宮古市～大槌町～釜石市～大船渡市

6月30日

大船渡市～陸前高田市～気仙沼市経由～南三陸町～石巻市～仙台市

※Aコースは、津波沿岸部を訪問するのが初めての方、この5年目の活動状況を確認したい方等のためのコース。

≪6月29日(月)≫

Aコース参加者は、10時半にカトリック宮古教会聖堂に集合し、神田神父様と小野寺神父様のご挨拶およびオリエンテーション後、札幌カリタス宮古ベース世話人の和田真一氏からこれまでの宮古ベースの歩みや被災地の状況等についてお話をうかがった。お話しの後、聖堂にて祈りを捧げ、大槌ベースへ向けて宮古教会を出発。

◆札幌カリタス宮古ベースの歩み

宮古ベース世話人 和田真一氏◆



【宮古ベースの歩み】

2011年

4月8日 札幌教区サポートセンターを設置。その後、先遣隊が宮古入り。

4月17日 ボランティア第1陣派遣。当時は宮古市に社会福祉協議会が受け入れをしていなかったため、隣の山田町で瓦礫撤去作業に従事。宮古市内では個人的要請にも応じた。

5月31日 札幌に「後方支援会議」を設置し、以降今日まで、月一回継続している。

6月 宮古市社協がボランティア受け入れを始めたため、「カリタスジャパン」として登録清掃作業に従事。

7月5日 「ニュースレター」第1号発行。

7月25日 「移動カフェ」開始、社協の「サロン」活動にも協力。

12月 空き仮設住宅の使用を許可され、男性ボランティアはそれまでの聖堂寝泊りを解消。

2012年

5月 仮設住宅をもう一室借りることができ、女性ボランティアの司祭館寝泊りを解消。

10月 「サロン」活動中止となるも「移動カフェ」は継続。

2013年

4月 ベース常駐を廃し、5人の「世話人」交代制となる。

6月 仮設住宅返還要請があり、中古住宅を購入し、ボランティアの生活拠点とする。

【支援の内容】

・ボランティア開始前に必ず、オリエンテーションを行っている。

※傾聴を基本としたカフェの開催

※全国からの支援物資の配布

※手芸用の布、ミシン、アイロン、カラオケセットの提供「さをり織り」グループへの機材材料の提供

※他のボランティア団体への支援

※札幌の若手音楽家を招聘しコンサートの開催

(2組8回、32日65公演)

※これまでのボランティア参加人数は、札幌で受付した方が762名、そのほかにも30～40名あり。

大槌ベース到着後、昼食をとりながら、大槌ベーススタッフの亀岡昇氏より大槌町の復興状況についてお話をうかがう。昼食後、大槌町の嵩上げ工事の様子を見学し、NPO法人カリタス釜石へ向かった。

2014年 全国担当者会議時の大槌町



2015年全国会議視察時 広範囲でかさ上げ工事が行われている

◆大槌ベーススタッフ亀岡昇氏の話◆

大槌町の復興状況は、現在、盛土作業が行われており、以前の風景とはまったく変わっている。盛土は、5メートルから8メートルくらい。盛土を寝かせておいてまた移動すること多い。

宮城県では道路工事はほぼ終わっており、現在は岩手県、福島県で主になされている。

カリタス釜石では、釜石市で写真館を営んでいる菊地写真館館長の菊地信平氏から釜石の被災状況と復興状況について写真のスライドショーを見ながらお話をうかがった。スライドショーの写真には、地震・津波の当日の写真、道路に後ろから津波が押し寄せてきている写真もあった。

その後、カリタス釜石の伊瀬聖子氏からカリタス釜石の活動状況のお話をうかがった。釜石教会の信徒たちが少しずつ集まって活動をはじめたのがこの特徴。物資が届いたときの分配も、必要な人に必要なだけということで、行政のやり方とは違っていたとのこと。



カリタス釜石にて、説明を聞く参加者たち

カリタス釜石を出発し、平田の復興公営住宅を見学。平田への移動時のバスの中でベーススタッフから、次のお話があった。

この地では、「地震が来たら、次は津波が来る」という教育が徹底しており、子どもたちは皆助かった。例外はその日早退けした子と、お母さんが迎えに来た子。被災した子が体験を話すことにより、本人にも、見学やボランティアに来た子にもよい影響を与えた。

平田の復興公営住宅に到着すると、そこには復興公営住宅と仮設住宅が並列していた。公営住宅へペットを連れて入ることの可否で、情報が異なり、入居後に他へ移動ということもあった。また、県が建てて市が運営するという形だったため、自治会ができるまで時間がかかり、集会所を使用できなかったため、ボランティアも入ることができなかった。ようやくカリタスが入れるようになった。自治会は、内部で問題がある場合や外部との連絡のため、とても大切な機能を持っているとのことのお話だった。

平田の復興公営住宅から、この日の宿泊先となる大船渡市へ移動し、ホテルへチェックインした後、各々徒歩で大船渡ベースへ移動し、大船渡ベースにてベースが漁業支援を行っている船本敬史氏から漁業の復興状況について、東海新報元記者の木下繁喜氏から行政が進める復興事業の問題についてお話をいただいた。

その後、夕食および交流会でこの日の日程を終了した。



交流会（大船渡ベースにて）

◆漁業の復興状況について

船本敬史氏（カキ漁業支援先）◆

27年前、手仕事で初めたカキ養殖。徐々に機械化され、作業も楽になり、販売まで手がけたが、震災ですべて流出した。

幸い自宅が残ったので、徐々に復興した。3年半で述べ1,000人を超えるカリタスさんの助けをいただいた。現在ほとんどの漁業活動は震災前の状況に戻ったと言える。元に戻る、と言うよりも、観光産業に励みたいと思っている。屋形船で、地場産業を新たにしたい。花巻空港を使い、今は台湾との協働に向けて動いている。



◆行政が進める復興事業の問題について

木下繁喜氏（東海新報元記者）◆

ある日のNHKのニュースで、災害時に「歩いて避難すべし」と言う教訓が生かされていない、との批判があった。しかし現実には、車を置いて逃げたために車はすべて流された。平時から車と人を合わせて考えておくことが必要である。危機管理の教訓はこれである。

陸前高田で12.5メートル（3階建ての高さ）の防潮堤を建設しようとしているが、今回の3.11には15メートルの津波が来たので、役に立たない防潮堤に意味があるかどうか疑わしい。

20万人近くがまだ避難生活をしている。4年経って、プレハブは腐って傾いてきている。災害公営住宅の建設は遅れている。現在完成しているのは全体の26%程度で、全部できるのは3年後。市が造成した土地は3世帯分で、18,000万円かかる。大船渡では66区画用意したが、希望者は6区画のみで、この話は取りやめになった。

高齢者が多いので、遠隔の地に行く人はいない。行政は高台にいれば守れると思っているが、人々の生活のことを守れない。このことをどう考えているのか疑問。

土地区画整理事業という公共の土地を整理して公園などにする事業があるが、一般の住宅も該当する。市が決めた割合で、無償で市に取られることになる。例えば、中古の土地・住宅50坪を1,700万円で購入、ローンで支払っている。買取で一坪8万円、400万円。減歩率10～15%で5坪を買い戻す。自分の土地ではなくなったのに、ローンは払い続けなければならない。

東日本大震災は自然災害、しかし、復興と言う第2の津波を行政が行っている。



陸前高田市のベルトコンベアー

«6月30日（火）»

大船渡教会でのミサ、ホテルでの朝食後、陸前高田市へ出発。道の駅高田にある追悼施設、陸前高田復興まちづくり情報館、陸前高田の市街地かさ上げ工事を見学した。道の駅高田の近くのかさ上げ工事では、3kmにおよぶベルトコンベアーで、山から土を下ろしていた。盛土また盛土の風景。

陸前高田市から気仙沼市を經由し、南三陸町へ。南三陸町さんさん商店街で昼食。仮設商店街の食堂で新鮮な海鮮丼をいただいた。その後、米川ベースの千葉道生ベース長に米川ベースの活動についてと南三陸町の現状を説明していただいた。



南三陸町・旧防災対策庁舎前 奥では、かさ上げ工事が進んでいる

【米川ベースの活動】

産業支援が主である：カキの養殖、わかめ、ほやなど。

石の除去作業：菊農家の土地から石を取り除く。

しいたけ農家：普通の生活には支障がなくとも、しいたけ原木は放射能原子を吸収しやすい。

南三陸町防災庁舎は今後20年遺構として県が管理し、残すことになったと今日（6月30日）の新聞に出ていたためか、新聞記者が数名来ていた。この庁舎で、最後まで避難に関する放送を続けた女性が大きく報道されたが、その親に対し「あなたの娘だけでない（よいことをしたのは）」との非難もあったとのこと。

高野会館4階建て（結婚式場）は全員を屋上に避難させて全員助かった。3階4階にカキや魚が散らばって残っていた。

南三陸町では、仮設住宅から公営住宅への移動が始まり、仮設がいてくると仮設の縮小で仮設から仮設への移動が起こる。共同体の作り直しが必要になり、非常に難しいとのことだった。

志津川中学校から市街地の復興事業を遠景し、その後、防災庁舎を視察後、南三陸町社会福祉協議会で猪又事務局長と仮設住宅支援員2名のお話をうかがった。

南三陸町社会福祉協議会では、2011年3月26日から災害支援を開始した。主に、児童、障害者、老人を対象に。その後、緊急雇用として、仮設に住む方を採用して仮設の方を支援していただいた。

42名の支援員で、58ヵ所（約4,000人）を支援した。

◆仮設支援員さんのお話 阿部福美氏・千葉ユミ氏◆ ～阿部福美氏～

いろんな地域から仮設に来ているので難しかったが、自身も被災者であることがわかったら、心を開いてくれた。

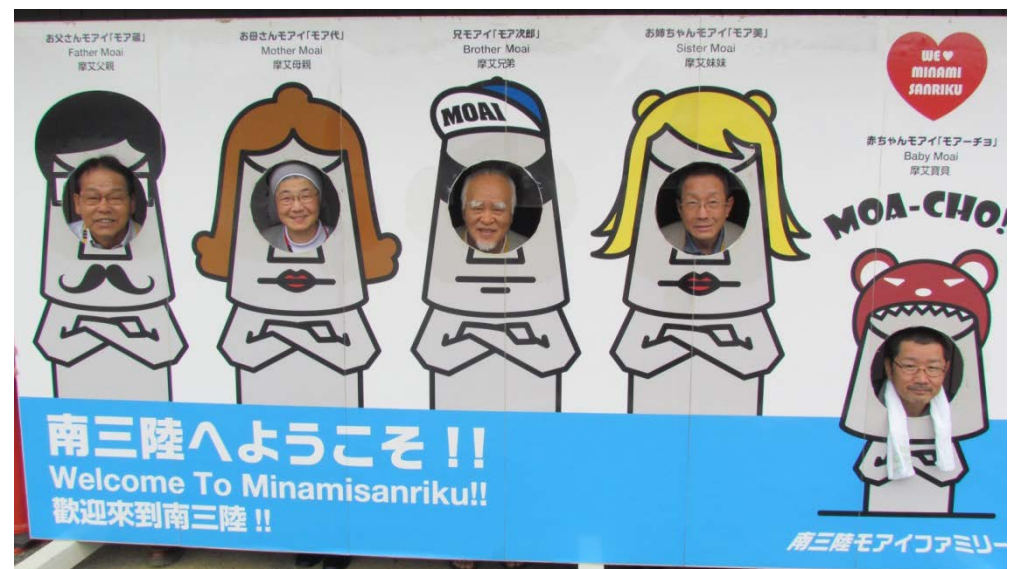
今は4年経つので、「気を遣っていた」状態から「気を遣わない」状態へと移り、それまでこらえていた人がこらえなくなった。「うるさい、どこかへ行け」「俺たちだって行くところがない」などの会話も聞える。

戸倉地区では公営住宅はまだ建っていないが、隣が近すぎてうまくやっていけるか不安、と言う人もいる。住民と住民をつなぐ支援をしたい。

～千葉ユミ氏～

家は残っても立ち退きを命じられた人もいる。歌津地区では、災害公営住宅は28戸中23戸入っているほど好評。公営住宅では、自分から出て行かないと人に出会えない。体調が悪いとき、だれに頼めばいいのか、住民同志のかかわりが仮設の時のようではない。お年寄りは、若い人に任せていて引っ越しの日も分からない。支援員がいるうちに見守り、集まりをしておきたい。

仮設の集約については、友達になっていく、と言う感覚でないと生きていけない。経済格差もあり、なんでもしてもらいたい人もいるし、自分でしたい人もいるし、多様である。



南三陸ポータルセンター近くのパネル♪ 旅の記念にぜひ一枚！

南三陸町を出発し、石巻ベースへ向かった。石巻ベースでは、中村愛ベース長より現状の説明をうけ、その後市街地視察を行った。

石巻ベースは、2011年3月24日に石巻教会で立ち上げた。同年8月に現在地に移転。現在は、常駐4名と仙台サポートセンターから2名応援をいただいて活動している。

【活動内容】

- ・ベースはオープンスペースとして9：30～17：00まで開いている。お茶お菓子を提供。お茶を飲みながら、手芸、コンサートなど、共にいることを大切にしている。
- ・仮設へお茶っこに出かける。ここでは仮設の集約はしない（133箇所）
- ・ごみ拾い、花壇や荒れ果てた土地の手入れなどもしている。
- ・復興公営住宅は4,850棟建設予定であるが、完成はまだ10%に満たない現状。



石巻ベースにて説明をする中村ベース長（左端）

石巻の市街地視察後、一路、仙台市へ向かい、元寺小路教会でBコースと合流し、交流会を行い、2日目を終えた。

新しい支援の形を探る時

高松教区 谷口 広海

これまでの「全国担当者会議」が今回から「全国会議」と衣を替え、一般信徒を交えての「東日本大震災復興支援第5回全国会議」と銘打ち、6月28日から3日間の日程で開催された。

各教区の震災復興担当者、修道会担当者と信徒が参加する中で、わずかとはいえ、復興支援活動に携わっている私たちも5年目の被災地の現実を実際に見、さらに耳を傾けることによって、仙台教区が継続している支援活動と、その後方支援のあり方についての情報を共有するため、事務局が準備されたコースのうち、Aコースに参加した。

第1日目は心地よい晴天の中、宮古教会からの始動ということで、仙台教区の小野寺洋一師、大阪教会管区の神田裕師と司祭、信徒、修道女会シスター8名を含む17名の参加者が宮古教会に集まった。

Aコースの概略は2日間を掛け、岩手、宮城県沿岸部視察コースとして宮古から大槌、釜石、大船渡、陸前高田、気仙沼、南三陸を経て石巻に至るものであった。

まず、宮古教会では札幌カリタス宮古ベースが準備された資料を基に、世話人を務められている和田真一氏による大震災の発生からこれまでの支援活動の推移についての説明に耳を傾けた。その後、バスに乗り込みAコースの被災沿岸部復興状況視察が始まった。



亀岡氏の説明を聞く参加者たち（旧大槌庁役場前）

大槌では甚大な人的被害を被り、現在も当時のままにある大槌町役場とそこにある慰霊堂で祈りを捧げた。この先の被害が大きかった箇所は何処も同じように、土地のかさ上げのための盛り土の仮置きにより、以前のように周りを見通すことが出来ない状況になっていたことに大変な驚きを感じた。ベース長の片岡氏の説明を聞いた後、数人が新たに立ち上げられた大槌ベースを訪問することが出来た。

その後、NPOとして活動しているカリタス釜石を訪れ、菊地写真館の菊地信平氏が、人の命と自然がぶつかり、生死の境にある人々の過酷な様子を切り取った、衝撃的でもある生の現実を映し出す映像にしばし茫然とさせられた。



スライド写真を使いながら説明される菊地氏

1日目の最後の目的地へ向かうバスに途中まで同乗して下さった釜石ベースの伊勢聖子氏による被災現場の説明を聞きながら、予想も出来なかった被災地と被災者のニーズの変化にも驚かされ、開眼させられたような気がする。

大船渡ベースでは、大船渡地区の牡蛎漁師の船本敬史氏が、牡蛎を観光資源として地域おこしに大きな希望を持ち、そこに賭ける情熱をうかがった。その後、元東海新報記者の大木繁喜氏による「行政が進める復興事業の問題点について」と題する講演では、私たちのこれからの復興支援の在り方に大きく関わる内容を含み、また衝撃でもあった。その内容を端的に「壊れた金魚鉢から放り出されて、のたうちまわっている金魚をしりめに、きれいな金魚鉢を作り直そうとしている」と表現し、現在の復興の在り方に対する大きな疑問を突き付けていた。現実には痛みを抱えている人を置き去りにすることなく、その人たちの心に寄り添い、必要に目をとめることの大切さに、さらに心を向けるべきであると叫んでいるようであった。



現在の南三陸町の様子

2日目はさらに、陸前高田、南三陸、志津川、石巻を訪問しながら南下した。その車窓には、被災地の中心と他の被災地を結ぶ沿道の有りようは未だ手付かず破壊されたままの鉄道、廃屋、目と心をふさいでしまうような新防潮堤や心の癒しを提供するためなのか、トレーラーに乗った移動映画館なども映っていた。

この2日間の案内を務めた方々や南三陸町社会福祉協議会の仮設住宅支援員さんのお話の中でもたびたび取り上げられた、仮設住宅でやっと整ってきたコミュニティーが、災害公営住宅への転居などによって、またもや一からの出直しを迫られることによるストレスとむなしさに困惑を隠せないでいる被災者の支援も急務として聞こえた。しかし、その対応となるとまた霧の中に霞んでしまいそうだ。



シートで覆われたままの旧門脇小学校（石巻市）

3日目は仙台教区で震災発生当時からの被災者支援に心を砕き、その活動に関わった小教区からの報告を聞き、分かち合い、これからのカトリック教会としての支援の在り方を模索するためのヒントを探る会議となった。

被災地お膝元と遠隔地からの支援の在り方は自ずと違ってくとは思われるが、「疲れたもの、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませて上げよう。」（マタイ11章28節）というイエスの呼びかけに、困難はあっても全国の教会が心一つにしてイエスと共に歩むことが求められているようでもある。

7月11日土曜日、カリタス石巻ベースで七夕祭りを行いました。あるスタッフの「子ども縁日」の言葉に始まり、仙台の七夕と組み合わせ、「子ども向け」のイベントとして準備が始まりました。

結果としては、子どもから大人まで楽しむイベントとなりました。今までやったことがないイベント形式のため、毎日考える日々が続きました。イベントの日が近づくにつれて、ボランティア参加の連絡、遠くからまた近くからの支援の到着。一つひとつが私にとって「助けが来た」と感じられました。改めて、ここ石巻ベースが、いろんな方々との交わりの場所であると思いました。

七夕祭り当日の天気は晴れ。暑い中でも心地よい風が吹いていました。11時までに最終的な準備を行う中、早々といらっしゃるお客さん。しかし、そのお客さんが「何か手伝うことある？」と声を掛けてくださいました。参加者なのに、ボランティア、スタッフのことを気づかってくださる心に励まされました。



多くのボランティアさんにお手伝いいただきました

その後、お客さんが早く集まって来られたため、15分繰り上げて七夕祭りを開始。輪投げや水ヨーヨーなど準備していた催し物を楽しんでおられました。

食べ物も、カレーや塩漬けきゅうり、フランクフルト、ラムネにジュース。子ども以上に大人がラムネを飲んでいたのは予想外。程よくお腹が満たされてきたら、じゃんけん大会とカラオケ。じゃんけんは真剣勝負で皆さん挑まれ、最後に勝ち残った一人に景品を差し上げました。カラオケも小学生から大人まで楽しんで歌うことができました。イベントの始めから終わりまで、皆さんの笑顔があちこちで見ることができ、うれしくなりました。



子どもより大人が夢中のじゃんけん大会

終了時間は15時予定が14時で終了。後片付けもボランティアさんに手伝っていただき、あっという間に終わりました。

この日のイベント参加者は約80名。ボランティアは23名。一日に100人以上の人がベースにいたという出来事もすごいことだと思いました。反省が所々あるものの、七夕祭りを開催してよかったと思いました。

今回の七夕祭りは月命日でもありました。オープンスペースを利用される方の中に「その日はお墓参りに行かないといけなから七夕祭りにはいけないんだ」と話される方がおられました。震災から長い年月が過ぎても、未だに震災と向き合って生活しておられる方々がいます。その方がたに寄り添う方法はいろいろありますが、今回の七夕祭りも寄り添う方法として必要とされている活動だと思いました。

最後になりましたが、今回のイベントに支えてくださいましたすべての方々に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。



輪を持ちながら、どのおもちゃにしようか
考え中の女の子

夏到来！ 浦戸桂島海水浴場オープン

東日本大震災から5度目の今夏、宮城県内に29あった海水浴場のうち、今年オープンできるのはわずか4つ。そのトップを切って、塩釜市の「浦戸桂島海水浴場」が7月13日に海開き（開設期間：平成27年7月18日～8月16日）を行いました。

この海岸は、昨年、がれき撤去をして安全になった約100m（震災前の7分の1）の場所に限り、4年ぶりに営業を再開しました。

2011年、この地で塩釜ベースのボランティアとして、がれき撤去や側溝のヘドロかきなどの活動をされた方が、海開きの数日前、米川ベースでのボランティア活動の帰りに立ち寄られ、島の様子を画像とともにお知らせくださいました。



昨年より遊泳区域の幅を50m広げ、150mで遊泳が可能に

塩釜ベースで何度か清掃作業をした砂浜は、市職員の手で整備がすみ、島民の方々がシャワーブースを7月18日のオープンに間に合うよう手づくりで準備されていたそうです。

そして、島民の方と立ち話をした際、突然カリタスの名前が出て、「大変お世話になった、親身で丁寧だった」と話されたそうです。当時のスタッフのことなども覚えてくださり、震災後4年が経過した現在もカリタスのボランティア活動が評価されてるとうれしく思われたそうです。

震災から丸4年が経過し、被災地は、かさ上げ工事や災害公営住宅の建設などにより、様子が大きく変化しています。震災直後に被災地を訪れ、活動して下さったボランティアさんに、活動された土地を訪れていただき、現在の様子や被災地の問題などを知っていただければと改めて思いました。

お知らせくださったSさん、どうもありがとうございます。